

特に断らなければ $\mathbf{u} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ とする.

1. $L := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid |x| \leq 1, y = \pm 1\} \cup \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid x = \pm 1, |y| \leq 1\}$ とおく.

(1) L を図示せよ. また L が囲む有界領域 Ω を図示せよ.

(2) L を表すパラメータ $\mathbf{l}: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$ で, 周期的, 区分的に正則であり, $\partial\Omega$ の境界の向きを表すものを一つ求めよ.

(ヒント: 4 つに区切って場合分けして定義するとよい) さらに, その周期を求めよ.

(3) (2) で定めたパラメータに対し, $\mathbf{l}(t) \in L$ における法ベクトル $\hat{\mathbf{n}}(t)$ を求めよ.

(4) $\mathbb{R}^2 - \{\mathbf{0}\}$ 上のベクトル場 $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \frac{\mathbf{u}}{|\mathbf{u}|}$ に対し, $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} d\mathbf{l}$ を計算せよ.

2. 次の領域 Ω とベクトル場 \mathbf{V} に対し, 境界 $L := \partial\Omega$ の向きを表す周期的な正則パラメータ \mathbf{l} を一つ求め, $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} d\mathbf{l}$ を計算せよ.

(1) $\Omega := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid (x-a)^2 + (y-b)^2 < 1\}$, $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} x+y \\ -y \end{pmatrix}$ (2) $\Omega := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid \frac{x^2}{4} + y^2 < 1\}$, $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} x+2xy \\ x-y^2 \end{pmatrix}$

(3) $\Omega := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid 1 < |\mathbf{u}| < 2\}$, $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \frac{1}{|\mathbf{u}|} \begin{pmatrix} y \\ -x \end{pmatrix}$ (問題 4 も参照せよ)

3. L を正則な曲線とし, \mathbf{l}, \mathbf{m} を L を表す正則パラメータ, \mathbf{l}, \mathbf{m} に対応する法ベクトルを $\mathbf{n}_l, \mathbf{n}_m$ とする.

(1) \mathbf{l} と \mathbf{m} が L に同じ向きを定めるとき, $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n}_l d\mathbf{l} = \int_m \mathbf{V} \cdot \mathbf{n}_m d\mathbf{m}$ を示せ. (教科書 p. 31 の補題 1.44 参照)

(2) \mathbf{l} と \mathbf{m} が L に逆の向きを定めるとき, $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n}_l d\mathbf{l}$ と $\int_m \mathbf{V} \cdot \mathbf{n}_m d\mathbf{m}$ を比べよ.

4. $r > 0$ に対し, $L_r := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid |x| \leq r, y = \pm r\} \cup \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid x = \pm r, |y| \leq r\}$ とおく. 問題 1 の L は L_1 である.

(1) L_1 と L_2 に囲まれる有界領域 Ω' を図示せよ.

(2) $\partial\Omega'$ の向きを表すような, 周期的, 区分的に正則な L_1, L_2 のパラメータ $\mathbf{l}_1, \mathbf{l}_2$ を一つ求めよ.

(3) \mathbf{l}_1 と問題 1. (2) のパラメータは L_1 に同じ向きを定めるか?

(4) Ω' の補集合 $\mathbb{R}^2 - \Omega' := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid \mathbf{u} \notin \Omega'\}$ (講義では $(\Omega')^c$ と書いた) は有界領域ではないことを示せ.

5. 曲線 L の正則パラメータ $\mathbf{l}_1, \mathbf{l}_2$ について, この二つが同じ向きを表すとき, $\mathbf{l}_1 \approx \mathbf{l}_2$ と書くことにする. \approx は同値関係であることを示せ. すなわち, 以下のことを示せ:

(i) $\mathbf{l} \approx \mathbf{l}$ (ii) $\mathbf{l}_1 \approx \mathbf{l}_2$ ならば $\mathbf{l}_2 \approx \mathbf{l}_1$ (iii) $\mathbf{l}_1 \approx \mathbf{l}_2$ かつ $\mathbf{l}_2 \approx \mathbf{l}_3$ ならば $\mathbf{l}_1 \approx \mathbf{l}_3$

6. $\Omega \subset \mathbb{R}^2$ を, 正則な閉曲線 L_1, \dots, L_k で囲まれた有界領域とする. 境界 $\partial\Omega = L_1 \cup \dots \cup L_k$ の向きは, 法ベクトルが Ω^c に向かうような向きとする, と約束した. ところで, そもそも「 Ω^c に向かう」とは (直感的には明らかだろうが) 厳密にはどのように定義したらよいか?

(提出の必要はありません)

補足. 講義で与えた線積分 (その 2) の定義 44 が, 教科書の定義 1.43 と同一のものであることを説明しておきます.

一般に正則パラメータ \mathbf{l} に対し, 法ベクトル $\hat{\mathbf{n}}(t) := \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix} \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t)$ の長さは $|\hat{\mathbf{n}}(t)| = \left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right| \cdots (*)$ で, これは t

に依存して変化しますが, 0 にはなりません (\mathbf{l} が正則だから). よって $\mathbf{n}(t) := |\hat{\mathbf{n}}(t)|^{-1} \hat{\mathbf{n}}(t)$ というベクトルが定義され

(分母が 0 にならない), $\mathbf{n}(t)$ は法ベクトル $\hat{\mathbf{n}}(t)$ と同じ向きのベクトルで, t によらず $|\mathbf{n}(t)| = 1$ です. この \mathbf{n} が教科書 28 ページの単位法ベクトルです. 「単位」というのは長さが 1 であることを指します. \mathbf{n} の定義と (*) より

$\hat{\mathbf{n}}(t) = |\hat{\mathbf{n}}(t)| \mathbf{n}(t) = \left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right| \mathbf{n}(t)$ ですから, 線積分 (その 2) は $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} d\mathbf{l} = \int_a^b \mathbf{V}(\mathbf{l}(t)) \cdot \hat{\mathbf{n}}(t) dt = \int_a^b \left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right| \mathbf{V}(\mathbf{l}(t)) \cdot \mathbf{n}(t) dt$

とも書けます. これは教科書の定義 1.43 に一致します. 具体的に計算してみるとわかりますが, 後者だと $\left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right|$ で

割って $\mathbf{n}(t)$ を求めたあと, もう一度 $\left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right|$ をかけることになって二度手間なので, 講義では前者を採用しました.

補足. $\frac{dl}{dt}(t)$ を接ベクトルと呼ぶことについて, 講義で話す時間がないので, ここで補足しておきます.

正則パラメータ $l: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$ で表される曲線 $L = l(\mathbb{R})$ を考えます.

定義. $l(a) \in L$ における L の接線を

$$l(a) \text{ を通り } \frac{dl}{dt}(a) \text{ に平行な直線} \quad (*)$$

と定義する.

講義で述べたように, どんなパラメータを取っても, $p \in L$ における接ベクトルはすべて平行です. よって p における接線は L と p だけで決まります.

今までは「接線」と言えば

$$y = f(x) \text{ のグラフの } (a, f(a)) \text{ における接線の式は } y = f'(a)(x - a) + f(a) \text{ である} \quad (**)$$

という形で出てきていたと思います. (*) と (**) は, 次に見るように同一のものです.

(1) まず, L が一変数 C^∞ 級関数 $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ のグラフである場合を考えます. このとき $l: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$ を

$$l(t) := \begin{pmatrix} t \\ f(t) \end{pmatrix}$$

とおくと l は L を表し, $\frac{dl}{dt}(t) = \begin{pmatrix} 1 \\ f'(t) \end{pmatrix} \neq \mathbf{0}$ なので L の正則パラメータです.

(*) をみたくす直線は

$$m: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2, \quad m(t) := l(a) + (t - a) \frac{dl}{dt}(a)$$

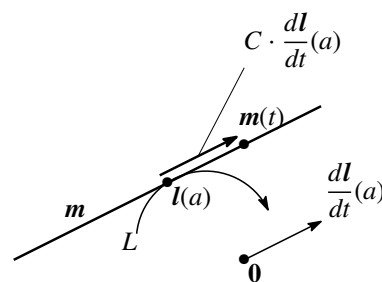
で表せます (右図で $C = t - a$ とおいた). 成分を計算してみると

$$m(t) = \begin{pmatrix} a \\ f(a) \end{pmatrix} + (t - a) \begin{pmatrix} 1 \\ f'(a) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} t \\ f'(a)(t - a) + f(a) \end{pmatrix}$$

ですから, m は直線 $y = f'(a)(x - a) + f(a)$ を表します. これは (**)

と一致します.

少なくとも L が $y = f(x)$ のグラフである場合, (*) は今までよく知っていた (**) の意味での「接線」に一致することがわかりました. 従って $\frac{dl}{dt}(t)$ は (**) の意味での「接線」に平行なので, $\frac{dl}{dt}(t)$ を「接ベクトル」と呼ぶのは自然だと思えます.



(2) 一般の正則パラメータ $l = \begin{pmatrix} l_1 \\ l_2 \end{pmatrix}$ で表される曲線 L の場合, 正則性から $l_1'(a) \neq 0$ または $l_2'(a) \neq 0$ の少なくとも一方が成り立ちます. 例えば $l_2'(a) \neq 0$ の場合, 逆関数定理により, $l_2(a)$ の近くだけで定義される l_2 の逆関数 h が存在します. h は逆関数ですから $l_2(h(s)) = s$ をみたくします. $\tilde{l} := l \circ h$ も ($l(a)$ 付近では) L を表します. $g := l_1 \circ h$ とおくと

$$\tilde{l}(s) = l(h(s)) = \begin{pmatrix} l_1(h(s)) \\ l_2(h(s)) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} g(s) \\ s \end{pmatrix}$$

ですから, L は $l(a)$ の近くでは, ある関数 $x = g(y)$ のグラフであることがわかります. (1) と同様に, $l(a)$ における (*) の意味での接線は, (**) の意味での g のグラフの「接線」に一致することがわかります.

なお, 接線の式 (**) を $y = f(a) + f'(a)(x - a)$ と書けば, これは f の Taylor 級数の 1 次の項までを取ったものであることに気づきます. 関数を多項式で近似するのが Taylor 級数ですが, 1 次式による近似を接線と呼ぶわけです.

幾何入門レポート問題 6 (2017 年 5 月 19 日)

担当：境 圭一

円 $x^2 + y^2 = 1$ の第一象限部分と x 軸, y 軸で囲まれる有界領域を Ω とする. $\partial\Omega$ を表す区分的に正則な周期的パラメータ $\mathbf{l}: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$ で, Ω の境界の向きを表すもの一つ求めよ. この \mathbf{l} を用いて, ベクトル場 $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \mathbf{u}$ に対し, 線積分 $\int_{\mathbf{l}} \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} d\mathbf{l}$ を計算せよ. (本質的でないヒント: 円の部分を $\mathbf{l}(t) = \begin{pmatrix} \cos(\pm\pi t/2) \\ \sin(\pm\pi t/2) \end{pmatrix}$ で表すと簡潔に記述できるかもしれない. Ω の境界の向きを与えるには, \pm はどちらが正しいか考えよ.)

(5/26 の 3 限開始時まで提出してください)

http://math.shinshu-u.ac.jp/~ksakai/17_geometry/17_geometry.html